特集11

著書の解題—11

# 『民家は生きてきた』

# 伊藤ていじ

『民家は生きてきた』は、美術出版社から出版された『日本の民家』全10巻の本文だけを1冊にまとめ、増補改訂を加えたもの。オリジナルの出版から4年後の1963年に上梓された。「地方的な特色を概観し、時代的な変化の一般的な傾向、それらが評価される所以を解説し、現存しない中世民家に多くのページを割いた」と付記している。バナキュラーな中に潜む必然性やシステムの中に文化を形成する基盤が見え隠れしている状況に、建築史家・伊藤ていじの慧眼が光を当てた。それは建築史、都市史の新局面を開いたと注目された。

民家は建築ではないといわれていた時代に、大病後の彼を奮い立たせて求めたものは何だったのか。弱冠32歳で全国を巡り始めた著者は、現在86歳。半世紀を経てもなお、あの飄々とした雰囲気は、昔のままだ。

[特集2]序論

倉方俊輔
SHUNSUKE KURAKATA

# 再読『民家は生きてきた』

## 生を可能にする叙述

読んでわくわくする本である。1957年から59年にかけて世に出た『日本の民家』全10巻の本文をまとめ、“民家は生きてきた”というタイトルを冠して1963年に刊行された。それにしても、妙に引っかかる題名ではないか。例えば「滅び行く民家」でも「民家は生きている」でもない。平明でありながら、意味がひとつに定まらない。単なるペシミズムにも、オプティミズムにも直行させず、読者をいざなう読後感を象徴しているように思う。

わくわく、はどこからやってくるのだろうか。本書はまず「概説」として日本列島の民家の相違と共通性、それに現代における意義を明快な個条書きで示した後、北から南へと筆を進める。すなわち「奥州路」に始まり、「両毛・武蔵野路」、「北陸路」、「甲州・信濃路」、「飛騨路」、「京の町」、「大和路」、「山陽路」、「四国路」、「西海路」。章立てはもとの『日本の民家』の構成に対応している。

若き二川幸夫の撮影した――『日本の民家』の最初の巻が出た年、伊藤は35歳、二川は25歳（！）である――写真は、巻末の32ページに凝縮され、本文中の挿図もまばらなのだが、ページを繰れば、地から生えた民家が目の前に現れるかのようだ。現物の添え物でも、ましてや写真の添え物でもない、文章の力を実感させられる。

本論を読み進めよう。「奥州路」の章は八郎潟近くにある奈良磐松家の伝承から始まる。その祖先は戦国時代、大和国（奈良県）から移住してきたという。開墾を目的に奥羽に移った者はきわめて多く、「秋田県下一三六一戸の旧家中一三一戸に達し」ている。こうして奈良磐松家の一伝承は、戦国時代末という、より広い時代背景に位置づけられ、論は民家の形式に及ぶ。L字型の平面をした南部曲屋のように、当地の民家形式は馬屋の存在に特徴づけられている。奈良磐松家の出身地である近畿以西では牛を家畜として多く飼育するが、奥羽では牛よりも馬なのである。それはこの地の気温が低く、耕作期間が短く、したがって作業工程を早める必要があるためだ。馬の動きは牛よりも早く、水分が多く遅効性の牛糞に対して、発酵性が高い馬糞は即効性の肥料である。故に鎌倉時代以後、馬が農耕用として飼われるようになり、そこから特有の民家の形式が生まれた。「二戸」や「八戸」といった地名も、当地と馬の密接なつながりを示すものである［＊1］。

およそ以上のような展開が冒頭の4ページに集約されている。ロジカルであり、数字や固有名詞さえも映像として見えてくるようだ。地を足でつかみ、大股で歩むがごとき文章に、すでに脆弱な研究者としての私は圧倒されてしまう。

記述に対応する奈良磐松家は、本書の刊行から2年後の1965年に「旧奈良家住宅」として重要文化財に指定された。その完成は文中にも書かれているとおり、江戸時代中期の宝暦年間（1751～63）であって、建物そのものは中世にさかのぼらない。にもかかわらず、解説を中世に遡行させるところに本書の特徴のひとつがある。

しかし、叙述は近世に遡行するだけではない。近代への言及の多さも特徴的である。「奥州路」の章を読み進めると、気仙大工の記述に至る。気仙大工が大規模な大工集団として成立したのは明治8～9年の凶作の後だという。明治維新後の自由な往来の下で活発な出稼ぎが始まり、各地への進出に伴って種々の流派が生まれた。例えば明治24年の東北本線の開通と、これを祝して翌年に仙台で開かれた大博覧会によって、東北地方の民家の柱間や大工道具の使い方も変化を余儀なくされた…、といったように、本書は交通の増大に伴う明治以降の変化を丁寧に叙述するのである。出稼ぎの屋根葺き職人である会津屋根屋についても解説は細かい。その数は天明の大飢饉を契機として増大し、凶作がなくなった戦後まで続いた。会津屋根屋が何を持ち、どのように仕事を行ったか、ディテールが詳らかにされている。だから、次のような文学的な記述で章を終えても違和感を覚えない。「大正のはじめ頃ならば一円もって家を出ると、一五円もって帰れた。（中略）土産物をみて喜ぶ妻や子供の顔を思いうかべると、稼ぎの苦労も忘れ、吹雪の狂う野道も勇んで歩くことができた」。

人々は章立ての境を越えて往来する。会津屋根屋は例えば「両毛・武蔵野路」の章にも顔を出す。

『民家は生きてきた』伊藤ていじ著（美術出版社　1963）

『日本の民家』全巻セットのケース

［＊1］二戸や八戸といった地名は鎌倉時代以後、「南部氏と工藤氏によって、実施された四門制に由来するものであり、平安朝末に設定された糟部郡を東西南北の四門にわけ、それを更に九ケの「戸」に分ち、各戸に軍用放牧場を経営したことにはじまる」（本書 p.32）

［＊2］『中世住居史―封建住居の成立』伊藤ていじ著（東京大学出版会　1958）

［＊3］中山繁信「デザインサーベイから学んだもの」『実測術―サーベイで都市を読む・建築を学ぶ』陣内秀信・中山繁信著（学芸出版社　2001、p.148）

くらかた・しゅんすけ――建築史家／1971年生まれ。1999年、早稲田大学大学院博士課程修了。博士（工学）。東京理科大学・芝浦工業大学・慶応大学・早稲田大学芸術学校非常勤講師。
主な著書：『伊東忠太を知っていますか』（共著、王国社　2003）、『吉阪隆正とル・コルビュジエ』（王国社　2005）、『吉阪隆正の迷宮』（共著、TOTO出版　2005）、『住宅70年代・狂い咲き』（共著、エクスナレッジ　2006）、『東京建築ガイドマップ 明治大正昭和』（共著、エクスナレッジ　2007）など。

養蚕地帯の農家では、屋根の葺き替えは早くから“ゆい”というような村の労働力交換では行われなくなり、西多摩の五日市から小河内にかけては会津の屋根屋が訪れた。それは農業経営が個々の家単位でなされるようになった証左であり、農村の分解の地域差を示すものであるという考察が加えられている。「北陸路」も雪国であり、出稼ぎ職人の輩出地である。「甲州・信濃路」の章は、山を越えてやってくる彼らが、足で歩く時代の文化の重要な担い手だったことを細やかに語る。

こうして見ていくと、本書の自律した文章の力、わくわく感の基底をなしているのが力動的な叙述であることが分かる。建物を個別に解説し、類型化するのではなく、人々が移動し、金銭が動き、時代が推移していく、その流動の断面として、伊藤は民家を描いている。

人々を突き動かしているのは、経済的、身分的制約である。そうした立場は、いわゆる経済決定論を意味しない。厳然たる経済のロジックの中で初めて、人間の本性が現れる。時代を変える個人の才覚が現れ、集団の英知が育まれ、はかなくも美しい望みが生まれる。筆者はその反映を民家に見い出している。それが我々の自由の領域であると告げているのではないか。

そうした関心からすれば、本書が言及する民家のありようが近世にとどまらないのも当然に思える。身分的制約が減少し、交通が増大した明治以降の社会の中で、民家はある意味で近世以上の展開をみせる。古くからの伝統と信じられているものが、近代の所産であることも少なくない。伊藤は建築史家らしい冷静な目で、明治以降の経済的条件が建築生産の何を変えていったのかを推し量る。その際に大きく参考にされているのが現地で取材したであろう、職人たちの証言である。現在と異なる“明治”との距離が、それを可能にしている。思えば、本書の執筆時は明治末年（1912）から50年も経過していない。70歳の古老に20歳の頃の話を尋ねれば、明治の日常をかなりの程度、知ることができる。彼がその頃、耳にした話を聞けば、幕末に手が届く。それに気づいた筆者の鋭い狙いによって、今となっては二度と手に入らない貴重な資料が本書の中核をなし、時代の全国的な流動を生き生きと捉えることができた。

もちろん、誤解してはならないのだが、本書は文献を軽視しているのではない。短いあとがきの中で伊藤は「私が、もう現存しない中世民家に数多くの頁をさいたのは、（中略）近世民家形成の基盤は、百鬼夜行してきまった形をもつことができなかった動乱の時代――南北朝時代から戦国時代にいたる二五〇年の間に形成されたと考えるから」だと記している。1958年に伊藤が著した『中世住居史』［＊2］は、それまで建築分野で使われていなかった文献類を駆使して、経済的、身分的な階層変化から近世の住居の成立を説明づけたことで、建築史・都市史の新局面を切り開いた。その成果は本書に大きく反映されている。

伊藤は取材と文献に、論理的な叙述で息を吹き込む。民家はその時、時代の制約の中で咲いた生の証拠として立ち現れる。それは――私たちの生もやはり制約の中にあるのだから――滅び去って良いものではないし、単に現在を生きているものでもない。過去の生を見出せるのが、文章の力なのだろう。『民家は生きてきた』の“きた”は過去形ではなく、発見の“きた”に思える。

本書から浮かび上がるのは、全国を駆け巡り、文献を渉猟し、息遣いの聞こえる文章を著す、エネルギッシュな伊藤ていじの姿である。ただ、よく知られているように――本人もしばしば強調するように――著者は決して頑強な体躯の所有者ではない。後に工学院大学の助手として近しく接した中山繁信は、『日本の民家』のために全国を巡る伊藤の姿を次のように描いている。

「60年代に入る少し前、伊藤ていじと二川幸夫の二人は地方を歩き回っていた。消え行く日本の民家を写真にとどめるために…。ある寒村に夕暮れがせまっていた。田園の中を終バスが停留所に近づく。二川は機材を肩に掛け、乗り遅れまいと必死で走る。しかし、伊藤は走らない。死ぬより乗り遅れた方がましだと思うから。この時、病み上がりの伊藤にとって走ることは死を意味していた。首から下げたニコンSさえ重荷に感じるほどであったのである」［＊3］。

死んだものとみなすことによって、いっそう生き生きとする。本書が光り輝かせ、今を生きる私たちに訴えてくるものが2つある。1つはそれが奇妙な果実だとしても、やはり美としか言いようのない民家の美であり、もう一つは建築の背後に潜む生のロジックである。たとえ民家のすべてが死んだとしても、本書の叙述は生き続けるだろう。✽

伊藤ていじ氏

特集2

**著書の解題—11**

[対談]時代を画した書籍—11

# 『民家は生きてきた』

# 民家に文化形成の基盤をみる

ゲスト **伊藤ていじ** TEIJI ITOH （建築史家）

聞き手 **内藤 廣** HIROSHI NAITO （建築家）

## 生と死の狭間で…、そして療養生活

内藤　今、何か書いていらっしゃるそうですね。

伊藤　書いてないと言うと嘘になるけれど、だまされて書いたんですよ。「8,000字、書いてください」って言われたんです。8,000字ならまあいいだろうと思って、それで持っていったら「膨らませて写真を入れて使いましょう。さらにもう少し加筆してください」って言うんです。だまされたわけです。

内藤　何だろう。まだ秘密ですね。

伊藤　そう、言わない（笑）。

内藤　では本題に入ります。今日はよろしくお願いします。

伊藤　こちらこそ。ご覧のとおり、僕ももう86歳ですからね。

内藤　大丈夫です（笑）。8,000字の原稿をお書きになるくらいですから、まだまだお元気な証拠です。実は先生、私は1950年、昭和25年生まれなんです。

伊藤　えーっ、本当？僕が死んだ年じゃない。

内藤　そうなんですよ（笑）。先生が“一度は死んだ”と言われている年です。医者に「明日は分からん」と言われた…。

伊藤　医者に引導を渡された年です。それを聞いて、お袋がね、その日のうちに駆け付けて来たんですよ。でね、1年先にはお袋が病気で死んだんです。親は自分を犠牲にして子どもを助けるんだね。

内藤　一番危なかった時というのが1950年、入院されていたんですね。

伊藤　最初はね、僕は旧制の高等学校だから、文部省の検査が毎年あるわけ。通常は、毎年1回なんですが、昭和15年に限って2回あったんです、秋にも。その時にツベルクリン反応が陰性から陽性に変わったんです。手が腫れ上がって、すごい水ぶくれが出来て、「お前はすぐ精密検査をしなきゃいけない」と言われて精密検査をした結果、「ここに影が出ている。だから軍事教練に出なくていい」と。

内藤　生死の境を越えてこられた先生は、やはり世の中の見方が変わったんでしょうね。

伊藤　僕は初めから体が弱かったから、別にその時だけ特別じゃないんです。医者が見に来て、すぐ帰ったんです。僕は目を閉じていたんだけど、「ああ、こりゃ良いこと言わないな」と思った。そしたら「もう、これでダメだ」と宣告したわけ。その時に死というのは、こんな簡単に来るのかと思った。本当に死ぬ時は、そういうものかどうか分からないけどね。

内藤　まだその時は旧制高校の時ですよね。建築の道にいこうと思ったのは、どういうきっかけだったんですか。

伊藤　成り行きだね。

内藤　成り行きと言ったって…。

伊藤　だって結局は戦争中なんだから、僕がどう思おうと関係なしに世の中は動いていくし、何を望もうとかなわないでしょう。だから建築なんていうのは、きっかけにしかすぎなかったんです。

内藤廣氏

内藤　関野（克）先生 [*1] の研究室にいかれた。

伊藤　それも偶然、成り行きです。でも実際に研究室にいたのはね、内田祥文さん [*2] です。関野先生はもうその時、大学に籍はあってもいなかったんじゃないかな。

内藤　いなかったというのは、調査ばっかりで？

伊藤　そう、文化財保護委員会の委員長をやっておられたから。僕は祥文さんが提示された卒業論文の題を選んだんです。提示されたものから選ばなきゃいけなかったからね。

内藤　この中から選べという感じだったわけですね？

伊藤　そう。いろんなものがあったけど、建築なんていうのは、大体、戦争とは関係ないでしょ。大部分はそういう題が出ていた。僕は祥文さんの下で、いわば理想都市論をやったんです。

内藤　それは卒業論文ですか。僕は歴史研究とか、そういうことをやられたのかと思っていたんですけれど、全然違うんですね。まだ戦時中ですよね。

伊藤　もちろん戦時中ですよ。

内藤　1945年、卒業論文を書かれた年に戦争が終わったことになりますか？

伊藤　書いたわけじゃないんです。

内藤　書かなくても良かったんですか？

伊藤　スイスで出版されているヴェルフリン系の美学者が書いた理想都市に関する本があって、それを祥文さんが持ってきたんです。お父さんは東大総長の内田祥三先生 [*3] だから、特別、持っていたんでしょうね。これを翻訳して卒業論文にしようと思ったわけで、書いたんじゃなくて翻訳したんです、それを。

内藤　良い卒業論文ですね。何語でした？

伊藤　ドイツ語。でもね、翻訳をしたものは祥文さんに渡して、祥文さんの持っていたドイツ語の本は、僕が借りて持っていたんです。でも、僕は病気になっちゃったから、どこにあるのか分からなくなって、祥文さんは亡くなられたから、そっちも分からなくなっちゃった。

内藤　先生は旧制高校から、ずっとお体の具合が悪くて、卒業論文を書いた辺りも体の調子はそれほど良かったわけじゃないでしょう。でも実際に入院されるのは5年後ぐらいですね。結核でずっと体調は芳しくはなかった？

伊藤　僕はだんだん悪くなったんです。

内藤　そういう中で終戦を迎えられて、その時の感じはどうでしたか。

伊藤　僕の場合は、学年短縮というのがあったの。大学に限らず、各高等学校もそうですけど、半年、短縮したの。僕は昭和17年の4月に入学なんです。その時に入った人は学年短縮がなかったんですが、僕はあったんです。

内藤　それはどういうことなんだろう。学年短縮というのは何が変わるんですか。

伊藤　3年でやるところをね、2年半でやるんです。戦争が終わったのが昭和20年の8月。20年の3月に普通なら卒業するでしょう。僕はその当時、1年余裕があったんです。だから、兵隊に行くのをやめるために卒業を延ばしたんです。延ばすといっても半年だけですけど。計算が合わないと思うでしょう。でも、これで合っているんです。何せ戦争中の話ですから。

内藤　そうすると卒業されたのは、戦争が終わってからですか？

伊藤　そう。終わった年の9月。ややこしいでしょ。

内藤　かなり…。

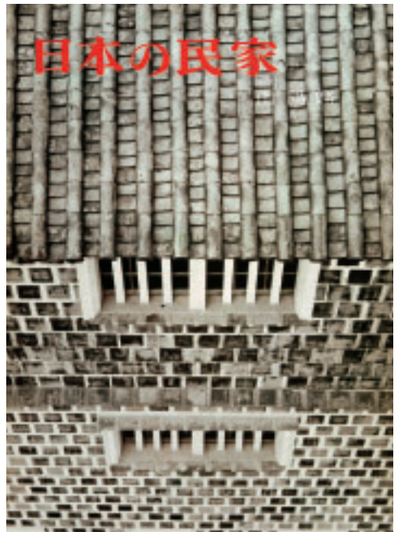
伊藤　その時には、そういう人が若干いたんですよ。

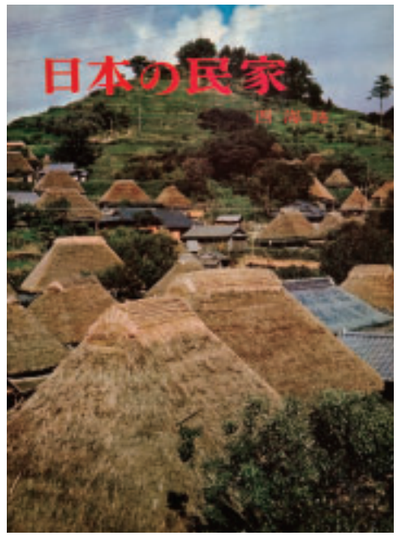
## 民家を見るきっかけは戦災復興院の木材調査

内藤　卒業なさってから東大建築学科の助手になられたのですね？

伊藤　僕はね、大学に在学している時に、「お前は内務省に行け」と言われたんですよ。「内務省ともう決めてある。内務省に行け」と。そう言われても僕は体力がないし、「勘弁してください」と言って頑張ったんだけど、「大学で決めたんだから内務省

[*1] 関野 克（1909〜2001）
（『INAX REPORT』No.172、p.21参照）
[*2] 内田祥文（1913〜46）
（『INAX REPORT』No.172、p.22参照）
[*3] 内田祥三（1885〜1972）
（『INAX REPORT』No.172、p.4〜参照）






**『日本の民家（全10巻）』**
撮影：二川幸夫、文：伊藤ていじ（美術出版社　1957〜59）
左上から右に――『大和・河内』（1957.12.15）、『高山・白川』（1958.2.1）、『武蔵・両毛』（1958.3.25）、『山陽路』（1958.5.10）、『信州・甲州』（1958.7.10）、『陸羽・岩代』（1958.10.1）、『四国路』（1958.12.25）、『京・山城』（1959.3.20）、『北陸路』（1959.6.15）、『西海路』（1959.10.20）

に行け」の一点張りでね。「どうしても嫌だと言うなら、自分で行ってお詫びをしてこい」というわけ。でね、僕は内務省に行ってお詫びをして、勘弁してもらったんですよ。

内藤　そうなんですか。昔の研究室は強引ですね。

伊藤　昔はああいうふうに大学が決めていたんですね。僕はその頃、おばの家に居候していたんです。練馬城址の豊島園の近くに城南住宅地という昭和の初めに出来た住宅地があって、一区画400坪なんですよ。そこにおばが1人で住んでいたんです。でね、豊島園の近所から内務省に行くには、池袋に出て山手線に乗ってどこで降りるのか、有楽町がいいのか新橋がいいのか。いずれにしても、これじゃあ体がもたないなと思ったわけね。

内藤　それでどうしたんですか（笑）。

伊藤　だから、そういうことを考えるとね、断るのが正解だと思った。僕はそれでおばの世話をしたんですよ、ずっと後まで。99歳で死んだんです。

内藤　大往生ですね。大学の助手になられるのは昭和22年ですね。

伊藤　本格的に病気になった年です。22年になりますか？

内藤　研究は始められていたんですか、その時は。

伊藤　研究はね、始めていない。

内藤　何をやっていたんですか？

伊藤　内務省の話があって断るでしょ。その後、戦争が終わってすぐに、戦災復興院というのが内務省の中に出来たんです。「お前は内務省を断ったんだから、そこの委員をやりなさい」と言うんです。つまり、木材調査だったんです。その時の状況がね、





［＊4］1万石は1803.9m³。よって、600万石は1,082,340m³

日本の木材の自然成長率は600万石［＊4］で、それを使って、木造で住宅を建設する計画を立てること。でね、木造住宅を建てるのはいいけど、寿命が分からないじゃない。それでね、その時に日本中あちこち歩いたんです。それが民家を研究するはじりみたいに結果としてなったんです。

内藤　民家研究はそこからですか。その当時はどこに行かれましたか。

伊藤　北の方はね、あれは福島県になるのか、岩手県になるのか、相馬というところです。

内藤　福島県ですね。

伊藤　南の方は滋賀県の近江八幡。大きな都市は焼けちゃっているから、そういう小さな所にあちこち行って、日本の木造住宅の寿命はどれぐらいかということを考えたんです。内務省や関野先生は、数字を出さなきゃダメだと言う。でも考えてみれば、木造住宅は燃えてなくなる場合もあるし、地震で壊れる場合もあるし、よく分からないじゃない。これは無駄なことだと思いました。そう思っていたら、病気になって倒れた（笑）。

内藤　その時にずいぶん民家をご覧になったんですね。

伊藤　結果として見ているんです。

内藤　その時、都市型の住宅と、先生がご覧になったような、たぶん農山村地の住宅とはやっぱりずいぶん違ったものだと思われましたか。

伊藤　違うし、もう残ってない。後になって行ったけど、全然変わっている。

内藤　その時の農村というのは、まだ豊かだったんでしょうね。

伊藤　豊かというのはどういう意味だろう。
内藤　飢えて死ぬことはない豊かさです。
伊藤　食いぶちがあるということね。でも、僕は行っても昼飯が食べられなかったです。
内藤　どうしてですか？
伊藤　その当時はね、食料は配給制で、切符を持っていかなきゃ米が出ないんです。で、事実、持っていかれないから、どこに行っても昼食は食べなかったですよ。結構、つらいよね。
内藤　食料の配給制なんて想像もできません。それで内務省で民家の調査をされて、それから体の具合が悪くなられて、倒れて入院されたんですよね。
伊藤　入院したのは助手になってから。助手というより、初めの2、3ヵ月は副手だったんですよ、定員の関係で。
内藤　副手というのがあるんですか。
伊藤　あったの。そういう席があって、2、3ヵ月は副手という名前で、それから助手になったんだけど、その助手の間、泊まる所がないじゃない。おばの所に帰るのは遠いし。だから僕は日曜日でも研究室にいたんです。
内藤　泊まっていたんですか？
伊藤　そう、泊まっていた。その時に喀血したんです。初めは少しだったけど、そのうちにたくさん出るようになって、とうとうおばに電話をしてね、「助けてくれ」って言ったんです。で、おばは私の母に電話して、「倒れているからすぐ上京しなさい」と言ったらしい。僕は研究室で寝ていた。
内藤　六本木にあった東大の生研でですか。
伊藤　そう、後の生研の研究室を1つ占領していたんです。本郷じゃ寝ていられないですよ。
内藤　それで大手術をされて、生死の境をさまよって、ともかく山を越えられて世の中に、いわゆるシャバに出てきたのは？
伊藤　昭和28年の1月18日。
内藤　よく覚えていらっしゃいますね。
伊藤　それはね、その当時は、今でいえば保険証みたいな治療のための特別の切符がなくて、国家公務員証は医療費がタダになる証明だったんですが、それが3年で切れるんです。それで愛知の療養所を出て、岐阜の実家にちょっと寄ってから東京に出てきたんです。東京駅は、まだ大部分、屋根がなかったですよ。
内藤　焼け落ちて？
伊藤　そう。焼け落ちて、まだ補修していなかった。
内藤　東京駅に降り立った時はどんな感じでした？
伊藤　「生きているな！」と思ったな。体がもつかなと思ったけど、いろんな人に助けられて、とにかく、もったんだなぁ。
内藤　当時は名古屋から東京まで何時間ぐらいですか。8時間くらい？
伊藤　何時間だろう、覚えていないな。座席の所に寝転んでいたからね。
内藤　まだその時は、完全に体は良くなっていらっしゃらなかったんですね。
伊藤　体力がないからね。喀血は止まっていたけど。でも考えてみるとね、僕はお袋を犠牲にして助かっているんだなということが分かった。それは後になってからだけどね。
内藤　後になってからというのは…。
伊藤　お袋は僕が療養所にいる時に死んだんですけど、保険証をお袋が預かっていてね、使わせなかったんですよ、僕に。
内藤　それはどういう理由で？
伊藤　大学にいる時から使わせなかったんです。使うのは恥だと思っていたんです。でね、使わなかった。結局、僕は療養所に3年いたんです。それで命が助かったようなものなんです。
内藤　保険証を使うことが恥だと思ったのは、どういうことでしょう。
伊藤　僕は、「これは自分の給料を積み立ててつくったものだからいいじゃないか」と言ったんだけど、お袋は「絶対ダメ、これは税金を使っている」と言うわけ。僕の家は地主だから、「地主というのは、他人のために金を出しても自分のためには金は使えない」って言うんです。
内藤　立派ですね。
伊藤　お袋はそう言って。「それじゃあ僕、死んじゃう」と言って、にらみ合いを続けたんですよ。結局その日はね、決着つかなかった。でも、お袋が負けて「じゃあ行ってもいい」と言うので、保険証は使わないで愛知の療養所に入ったんです。国の税金のお世話にはならないって。でもね、地主といってもその頃は農地解放で、本当はそんなこと言っていられないわけです。
内藤　地主はみんな大変な時ですよね。それで愛知の療養所に入られて、それから大手術をされて東京に出てこられて、いわゆるシャバに出てこられてからはどうされたんですか。大学に戻られたんですか。
伊藤　僕は考えてみれば、大学の在学中はもちろんね、卒業してもね、勉強してないなと思ったんです。だから、これから勉強しなきゃと思った。で、助手という名前になっているでしょう。助手というのは、文部教官なんですね。
内藤　基本的には公務員ですからね。
伊藤　今でいう公務員。当時は文部教官なんですよ。だから、文部教官は手伝いなんかする必要がないと思ったの。僕も理論武装したんです。先生が何を言おうとね、絶対やらない。自分の好きなことをやる。それが職務に忠実なことだと、自分自身に言い聞かせて、好きなことをやっていたわけですよ。
内藤　好きなことって何だったんですか。

（3）　3版　［産一金］　1981年（昭和56年）7月
めぐりあい
伊藤ていじ
語り合い“吹き”まくり…
川上秀光（かわかみ・ひでみつ）昭和16年、京都帝国大学工学部卒。大分県生まれ。東大工学部教授。
磯崎新（いそざき・あらた）昭和16年、大分県生まれ。東大工学部卒。建築家。
二川幸夫（ふたかわ・ゆきお）昭和17年、大阪府生まれ。早大大学院修了。建築家。
川上秀光
磯崎新
二川幸夫

伊藤ていじ「めぐりあい：語り合い“吹き”まくり…」『毎日新聞』1981.7.24（夕刊）

［＊5］川上秀光（1929〜）
都市計画家。1954年、東京大学工学部建築学科卒業。75〜88年、東京大学教授。87年、日本都市計画学会会長。主な著書に『巨大都市東京の計画論』（彰国社　1990）など
［＊6］『現代建築愚作論—現代における都市と建築に関する考察』八田利也著（彰国社　1961）
▸▸▸図版p.34

伊藤　勉強ですよ。
内藤　やっぱり（笑）。どんな勉強を。
伊藤　いろんなことを勉強していたけど、僕は友達がいなかったわけ。でね、磯崎（新）と川上（秀光）[＊5] は将来ものになる人物だと思って、目を付けたんです（笑）。
内藤　やっぱり磯崎さんと川上さんは異彩を放っていたわけですか？先生よりずいぶん年下になりますよね。
伊藤　でもね、一緒に何かやればものになると思って、磯崎と川上は親しくしたんです。川上は後に脳梗塞で倒れるけど、磯崎は元気ですよ。
内藤　磯崎さんと最初に会われたのは、東京に出てきてから。
伊藤　顔は知っているわけよ。彼らは本郷の東大の3階にいたからね。でも、本当に親しくなったのは、戻ってきてから。それから、丹下（健三）さんとも親しくなったんです。丹下さんは、実は戦争中から知っていたんです。彼は戦争中は大学院特別研究生で、いつも祥文さんの所に来ていたんです。僕は祥文さんの所にいたでしょ。丹下さんがしょっちゅう来て、いつも言いたいことを言うんですよ。僕らはいつもそれを聞いていた。
内藤　言いたいことって、どんなことを言われていたんですか。
伊藤　中身はよく覚えていないけど、“伝統論”だとか…。
内藤　磯崎さんと直接、話をされるようになったのは？
伊藤　だって同じ大学の建物の中にいるんだから、話はするでしょう。だけど実際に一緒に何かやろうと言ったのは、その直後ですよ。
内藤　何か、というのは。
伊藤　書いたもので分かるでしょう。
内藤　磯崎さん、川上さんとともに、1958年から60年にかけて八田利也（ハッタリヤ）のペンネームで書かれたものですね。それをまとめたのが『現代建築愚作論』[＊6]。民家の話は、大体1957年から59年ですから、『愚作論』と同じ時期ですね。そういうジャーナリスティックなこともやりつつ、片一方では地を這うような民家の研究をされていたわけですね。
伊藤　そう。何でもやっていたんですよ、その頃は。
内藤　『愚作論』の話は面白すぎますから、また後でじっくり伺うことにして、その前にライフワークともいえる民家の話を伺います。

## 二川さんの来訪で始まった『日本の民家』

内藤　1940年代と50年代のお話を伺ってきましたが、美術出版社から1959年に出版された10巻にのぼる『日本の民家』の解説をまとめた1963年出版の『民家は生きてきた』が本日のメインテーマです。1957年から59年までかかった大仕事『日本の民家』ですが、二川さんの写真で本をつくることになったのは、どういういきさつだったんですか。
伊藤　二川さんが「俺が写真撮るから、伊藤さん文章書いてよ」って言ってきたんです。
内藤　じゃあ二川さんが入り口だったんですね。
伊藤　そう。二川さんに「金は？」って聞いたら「美術出版の大下（正男）さんからもらってくる」と言うわけね。当時の社長ですよ。その当時、1ヵ月5万円だったと思います。
内藤　今の価値でいうとどれぐらいかな。分からないけど、結構な金額なんでしょうね。
伊藤　それを折半して取材費に当てたんです。つまり2万5千円でしょ。それで汽車代と飯代を賄う。その範囲で回るのがコツなんです。僕は身体障がい者手帳を持っていたから、障がい者割引があるんですよ。
内藤　伊藤先生は身体障がい者になるんですか？
伊藤　療養所を出る時から身体障がい者ですよ。長距離割引というのがあってね。行く時は初めに計画を立てて国鉄の路線図を書くでしょ。そうすると効率の良い切符をつくってくれたんですよ。結構安くなるんだ。でも、どこに何があるか分からないじゃない。
内藤　僕はそれがすごいと思っていたんです。分からなくても肝心なものを拾い上げている。
伊藤　勘ですよ、勘（笑）。
内藤　それがすごい。
伊藤　降りるのはね、適当な所で降りるわけ。どうせ鈍行に乗るんだから。
内藤　だけど、先生は内務省の戦災復興院の時に木材の調査で方々を回られて、その時のデータがあったんじゃないですか。大体こういう所にこういうものがあるだろうと。
伊藤　データはないけど、勘はあった。この辺りに何かありそうだという感じだよ。でね、適当に降りるわけ。何度も降りていると、ニオイがするんだなあ、駅の。「ここはあるぞ」という…。でね、ニオイに従って降りて、そこでバスに乗るんですよ。バスというのは、日本は地形の関係で真っすぐに山の方へ走って、そこが終点。そしてまた折り返して戻ってくるんですよ。だからバスに乗るんです。ある時に、実際には陸前高田という所から出ているんだけど、気仙沼から岩手県の一ノ関行きに乗ったわけ。ところがあの線路っておかしいんだよ。真っすぐ線路をつくればいいのに、ものすごく迂回して大回りしているんですよ。
内藤　それは最初に行った所ですか。
伊藤　そう、それで途中で降りる駅を決めていたんですよ。それはこの地方で一番最初に畳を使った家

があるという。ところがそこは、汽車から窓の外を見るとね、とてもそんな降りる気になれない。

内藤　何でですか。

伊藤　気分の問題だ。

内藤　気分（笑）。それは達人の世界だ。

伊藤　で、そこから乗ってね、陸前高田、陸中松川という所があったんですよ。そこで降りたの。でね、駅を降りたらね、田舎の村にもかかわらず、広い通りがあるんですよ。どこに何があるか分からないでしょ。僕はとりあえず歩いて行ったんです。そうしたらね、「おいおい」って言うわけ。着物を着て下駄を履いている人が「君、どこから来たのか？」って言うわけですよ。

内藤　向こうも何か感じたんでしょうね。

伊藤　「東京です」って言ったら、「そんな気がする」と言って、「俺の家に来い。この近くだから」って、言うんです。「実を言うと、俺は新国劇の脚本家だ」と…。「へえ、そうですか」と言って、その人について行ったら、昔の大名武士の平屋の建物に住んでおられたんですよ。そして「僕の女房は新渡戸稲造の娘だ」って言うんですよ。

内藤　本当ですか。

伊藤　本当なんだって。そしたら新渡戸稲造さんの娘さんが出てきたの。色白でね、大柄な上品な人でした。そういうことも起きるんですよね。

内藤　その方は、どうしてそこに？

伊藤　疎開されていたんです。

内藤　それは面白い話ですね。

伊藤　そういうね、人との出会いが面白いんだな。建築と関係ないけどね。

内藤　面白いですね。でも先生の勘ってすごいですね。そうやってウロウロして、よくそういう所を…。

伊藤　もう終わり頃はね、本当に勘ですよ。ここの駅を降りる。そしてバスに乗って終点まで行って戻る。突き当たりの終点に行くまでにね、左右を見て「あの家が良さそうだ」と目を付ける。そうして帰りのバスに乗るわけよ。で、そこへ寄るんです。

内藤　いつも二川さんは一緒ですか。

伊藤　一緒じゃない。二川さんと一緒の時は滅多になかった。

内藤　そうなんですか。僕は一緒に回られたんだと思ってました。

伊藤　そうじゃない。

内藤　先生が行かれて“ここだぞ、ここ掘れワンワン”みたいなもんですか（笑）。

伊藤　二川さんは二川さんで撮りたい写真を撮ってくるわけ。僕は僕で行きたい所に行っているわけです。

内藤　じゃあ先生の行かれた所を二川さんが撮っているというわけでもないんですか。

伊藤　そういうこともあったけど、原則的には適当にやっていた。それがね、不思議と合うんですよ。

内藤　それは二川さんもさる者、なかなかですね。

伊藤　そうよ。二川さんは、なかなかの人だもん。

内藤　もともと二川さんと先生の出会いというのは、東京に戻ってきてからですか？

伊藤　あのね、別に2人は知り合いでも何でもなかったの。僕が工学部の1号館の3階にいたら、ある日突然「伊藤さん」と言って、二川さんが訪ねて来たの。で、「一緒に民家の仕事をしよう」と言われたんです。それで決まったんです。

内藤　いきなりですか。

伊藤　いきなり。「そりゃいいね」ということになって。

内藤　二川さんも何で伊藤先生に目を付けたのかな。

伊藤　名前は川添（登）さん［＊7］に聞いたんじゃないかと思う。

内藤　その時に、いろんな思いがあったと思いますけど、僕がちょっと伺ってみたかったのは、ちょうど『日本の民家』が10巻まで出たのは1959年ですから、取材を始められたのはもっと前ですよね。

伊藤　前ですよ。少しずつ少しずつためていってね、美術出版の大下さんに後から聞いたんだけど、「3巻までできたら上出来だ」って言っていたらしい。ところがね、3巻目辺りでね、賞をもらったんですよ、毎日出版文化賞［＊8］。そしたら「良いじゃない！」というわけで、結局10巻までいっちゃったんです。あの賞をもらわなかったら、本当に消えていたかもしれない。

内藤　いずれにしても大変な労力を費やして、いわゆるフィールドワークをやられたわけですけど。

伊藤　民家のために労力を費やしたという気持はないんですよ。生きるために。

内藤　生きるためと言っても、2万5千円ですからね。生きるためにはあんまりならなかったと思うけど（笑）。本は残りますからね。

伊藤　でも2万5千円の方は使ったら消えてなくなる（笑）。

内藤　確かにそうです。『日本の民家』全10巻をまとめてから約5年後の1963年に『民家は生きてきた』を上梓された。かなりの改訂増補を加えたとあとがきに書いてありますが、こちらも専門書の部類では大ベストセラーになりました。

伊藤　ずいぶん売れたね。

内藤　先生は民家の中に何を見ておられたんでしょうか。『民家は生きてきた』の概説で書いておられますが、構造と平面の一体化とか、デザインシステムとか形とか、極めて示唆に富むことを書いておられます。

伊藤　そう、見てね、考えごとはしていたんだな、いつも。バナキュラーなものに潜む必然性やシステムの中に、文化を形成する基盤のようなものが見え

［＊7］川添 登（1926〜）
（『INAX REPORT』No.171、p.23参照）
［＊8］第13回毎日出版文化賞『日本の民家 山陽路、高山・白川』（1959）

著作権所有者の都合により
掲出できません

「愛媛県南宇和の外泊部落」（『日本の民家 四国路』所収、撮影：二川幸夫）

隠れしていたんだろうね。それを自分なりの見方で捉えようとしていたんだと思うな。

## 民家の後ろ姿を追った写真家の眼と歴史家の眼

内藤　ちょっと話が戻りますけれども、先生が『日本の民家』をずっとやられているちょうどその頃というのは、日本が高度成長の入り口で、既に始まっていた頃ですよね。

伊藤　そう、おっしゃるとおり。

内藤　日本全体が変質し始めていたし、同時に日本の建築界も変わり始めていた時期だと思うんですけど、その時代の感じというのを先生はどういうふうに捉えられていたんでしょうか。

伊藤　それはそれだ。僕は知らんよ、と思っていた。

内藤　社会の動きなんて関心ない、と。

伊藤　僕はこう思っていたの。人が歩いた道を、また歩くとね、遅くなる。それよりもバイパスをダァーっと行った方が良い。その当時のバイパスというのは、回り道という意味です。俺は回り道で行くから他のことをやるよと…。川添さんなんかはメタボリズム［＊9］に熱心だったけど、僕は「あっそう」という感じだった。

内藤　やっぱり。伊藤ていじという人は一筋縄ではいかない人だと思っていたんですよ（笑）。

伊藤　僕は『現代建築愚作論』に書いてあるようなことをね、公言していたわけですよ。

内藤　片一方ではそういう“伊藤ていじなるもの”がいるわけです。関係ないと言いつつ、その時代の風潮を極めて批判的に見る。非常にシニカルですよね。

伊藤　そう。シニカルですよ。

内藤　川添さんの言うところのメフィストフェレスが乗り移った伊藤ていじという別の人がいる（笑）。

伊藤　シニカルだと思います。事実ね、そんなことをやったら遅れちゃうと思った。回り道した方が早いと思っていた。それをね、その当時の言葉にはなかったんだけど、僕は「バイパスで行く」と言ったわけ。今でこそバイパスは早いけど、その当時はバイパスなんてほとんどない時代だったからね。

内藤　今でこそ重要な流れのひとつになっているけれど、当時は民家に注目するというのは、全く異端だったんじゃないですか。当時はともかく高度成長、まずは1964年の東京オリンピック、そして70年の万博。そこにほとんどの関心が集まっていた。民俗系の人はともかく、建築で民家を関心の対象とする人は少なかったと思うんです。

伊藤　「これは建築じゃない」と言う人が多かったですよ。

内藤　いわゆる建築家たちの関心とは全く違うところにこだわった。

伊藤　そう、その当時はそうでした。僕のやっていることが分からないという人が多かった。僕は多くても少なくてもいいじゃないかと思っていた。それで日本中、あっちこっちうろついていたんです。

内藤　『日本の民家』の中で特に記憶に残っているのは何でしょう。

伊藤　それはひと言では言えない。例えば、四国の愛媛県にね、西海町に外泊（そとどまり）という所があるんですよ、今でもある。写真集に載っているけどね［＊10］。石垣の集落。あれなんか、探し当てようと思っても探せない所ですけど、印象深い町です。

内藤　石垣がダァーっとある所ですか？

伊藤　そうそう。

内藤　写真集だとこの写真ですか。とても綺麗です。

伊藤　あっちこっち歩いても見つからないからもう帰ろうと思った。西海町は岬の突端みたいなところにあるんですが、ふもとの所にバス停があるんですよ。そこからバスに乗って「もう帰ろう」と思った。二川さんが撮った石垣の山村というのは幾つもあるから、ここじゃなかったのかと思って。

内藤　その時は二川さんが一緒だったんですか？

伊藤　いや、二川さんの方が先だった。でもね、もう少し先まで行ってみたら、あったんだ。後でこの写真を見たアメリカのジャーナリストが、アメリカから東京へ来てね、「ここへ行く道を教えろ」って言うわけ。

内藤　この写真を見て…？

伊藤　教えろと言ったってね。アメリカからね、東京へ来るのと、東京から外泊に行くのでは、東京からの方が遠いよと言って笑ったんですよ。実際、ここに行くのは時間がかかるんです。当時は飛行機もないしね。そういうことがよくあったね。

内藤　外泊の石垣の集落は綺麗です。この写真を見たら行ってみたいと思うでしょうね。

伊藤　今は荒れていますよ。

内藤　もうこの石垣は残ってないんですか。

伊藤　石垣は残っていても、建物がどうか。坂道が多くてね、二川さんは馬力があるからいいけど、僕は病気で肺活量が少ないから、坂があるともうダメなの。

内藤　二川さんというのも不思議な人ですね。現代建築というか、当時でいうとスーパースターだったミノル・ヤマサキ［＊11］だったり、そういう人の作品を撮りつつも、こういう民家にものすごいエネルギーを投下する。要するに、何であれ「一級品しか撮らないんだ」という気概のようなものを感じます。現代建築を撮り始めたのは、この後ですか。

伊藤　当時は、現代建築は撮ってなかったと思う。

内藤　このGA版『日本の民家』［＊12］は、後につくられた本ですからね。

『日本の民家』

『び―NATURE AND THOUGHT IN JAPANESE DESIGN』

伊藤　そうそう、これは後の本です。

内藤　1980年にGAから復刻で再編集されているものです。二川さんの写真は、どれも「撮りたいから撮っているんだ」という感じがします。

伊藤　二川さんはね、納得するまで撮らないよね。あれは良いよね。

内藤　納得するまでシャッターを押さない？

伊藤　自分が納得するまで撮らないよ。編集者がいて「こう撮ってくれ」って言ってもダメ。

内藤　結構、強烈だったんですね、当時から。アングルが独特ですね。ちょっと低い。小津安二郎［＊13］のアングルみたいな目線。日本の空間を撮るには、やっぱりああいうのが正当なのかな。

伊藤　いや、初めの頃はいろんな目線で撮っていましたよ。

内藤　そうですか。

伊藤　だってね、飛騨高山の日下部さんの家のね、梁の上を1日かけて撮っていたんだから。

内藤　梁の上にまたがって撮ったような写真［＊14］ですね。

伊藤　そうです。二川さんは1日かけて日下部さんの梁を撮っていて、次の日は吉島さんの家も1日中撮って、でも撮ったのは梁ばっかりなんです。外観とか、他は全く撮らなかった。

内藤　梁以外には目もくれず…。

伊藤　そう、梁ばっかり。それでね、美術出版に見せたわけよ。

内藤　美術出版は何て言ったんですか。

伊藤　美術出版に行ったのは、二川さんの奥さんが、当時は美術出版で編集長をしていたと思うんですが、僕も一緒だったけど、「二川さん、梁の写真だけで本になると思うの？」ってやられていた（笑）。

内藤　二川さんは何て答えたんだろう（笑）。

伊藤　答えなかったよ。本にならないと思ったと思う。で、また撮影しに行った。その時ですよ、外観を撮ったのは。あれが気に入ったね。二川さんは、良いと思ったものは絶対にそれに固執する。飛騨高山は2軒並んでいるんですが、撮影したのは日下部さんが先だった。

内藤　『日本の民家 高山・白川』の入り口、最初は日下部邸になるわけですね。

伊藤　そうです。日下部さんがね、もうそこに住んでおられなくて、近くの神田町に住んでおられて、で、許可をもらって撮影したんです。

内藤　それから吉島家。

伊藤　それで隣の家もいいだろうって言って。吉島さんの家に行ったらね、あそこの主人はひと言も何もおっしゃらない。良いとも悪いとも。でもね、一生懸命、撮影をしていたんだけど、気に入っていらっしゃるのかどうか、皆目、分からない。何もおっしゃらないから、もうそろそろ失礼しようと思ったら「ちょっとお待ちなさい」って言うわけですよ。

内藤　先々代ですか。

伊藤　91歳で亡くなられた先代ですよ。でね、食事の用意をしてあるっておっしゃるんです。ライスカレーでしたけどね。「ああ、そうか、別に悪くはなかったんだな」とその時、初めて分かった。でも本当に親しくなったのは吉島さんですね。

内藤　もうずっとお付き合いが。

伊藤　ずーっと付き合っていました。文化財指定にするとか、部屋を借りるとか、何かにつけいろいろと。

## ワシントン大学の講義と『日本デザイン論』

内藤　先生は英語で日本の建築文化を外国に伝えることにも尽力されました。

伊藤　昭和35年、1960年に世界デザイン会議［＊15］があったでしょ。その時にね、「パンフレットをつくれ」って浅田（孝）さんが言うからね、「つくりましょう」って言ったわけですよ。浅田さんとは親しかったから、「何もかも任せます」って言うんです。「お金は？」って聞いたら「お金は何とかするよ」って。でね、その時に出来たのが『NATURE AND THOUGHT IN JAPANESE DESIGN』［＊16］という小冊子です。

内藤　それ、知らないんです。

伊藤　これはね、デザイン会議に出席した外国の参加者に配る冊子でした。

内藤　『NATURE AND THOUGHT IN JAPANESE DESIGN』？

伊藤　そう、大部分は絵図ですよ。でも短い説明が日本語とフランス語で入っているんですよ。それから英語と。それを見たワシントン大学の先生が「伊藤さん」と言って訪ねて来たの。「あなたが研究しているのは、われわれが研究しているのと同じだ。ぜひ、あなたを招聘したい」と言うわけです。僕は全然、知らなかったんですが…。

内藤　それがきっかけですか。

伊藤　そう。でね、僕は大学の断りなしに招聘してもらったんですよ。その時の条件が、週4コマっていうことだった。僕は「4コマはダメだ。僕は日本人だ。聞いているのは英語を話す人間だ。そんなうまく話せない。半分なら行く」と答えたんです。

内藤　半分ってことはどういうことですか。

伊藤　1週間に2コマという意味です。2コマなら、うまくやれば1日で済んじゃう。形式的には、1コマは2時間でしょ。そしたらね、それでいいということになったんです。で、2時間は学生に講義して、後の2時間は研究することでいいというわけです。僕はそれで行くことにしたんです。だけど先生方の承諾なんてとっていないわけね。

内藤　それは東大の先生方という意味ですか。

［＊9］メタボリズム
（『INAX REPORT』No.171、p.23参照）
［＊10］▸▸▸図版p.25
［＊11］ミノル・ヤマサキ（1912〜86）
（『INAX REPORT』No.171、p.25参照）
［＊12］『日本の民家』企画・撮影：二川幸夫、文：伊藤ていじ（A.D.A.EDITA Tokyo　1980）
▸▸▸図版上

［＊13］小津安二郎（1903〜63）
映画監督。1923年、松竹キネマ蒲田撮影所に入所。大久保忠素に師事。62年、日本藝術院会員。主な作品に『晩春』（1949）、『麦秋』（1951）、『東京物語』（1953）など
［＊14］▸▸▸図版p.28
［＊15］世界デザイン会議
（『INAX REPORT』No.171、p.23参照）
［＊16］『び―NATURE AND THOUGHT IN JAPANESE DESIGN』（財団法人世界デザイン会議日本運営会事務局　1960）▸▸▸図版下

伊藤　そう。僕の指導の先生は関野先生でしょ。最初に「誰の紹介でそんな席を引き受けたんだ」って言われちゃって…。

内藤　怒られたわけですね（笑）。

伊藤　そう、怒られちゃった。でもね、とにかく行ったんです。女房、子どももいたからね。子どもは2歳でした。行ったら、英語は子どもが一番早く覚えるし、文字も子どもの方が早かったですよ。

内藤　先生、渡米されたのは…。

伊藤　1963年の12月だったと思う。（ジョン・F・）ケネディが死んだ年です。暗殺された年の12月頃だったと思う。

内藤　じゃあ1963年です。

伊藤　そう？でね、アメリカに行ってから僕は体が楽になったんですよ。

内藤　それはどういうことですか？

伊藤　義務が少ないでしょ。気候も良いしね。体が楽だった。

内藤　アメリカでは何をしてたんですか…？と言ったら失礼ですけど。

伊藤　講義はね、週に2時間。

内藤　それ以外は？

伊藤　それ以外はね、よその大学から招待が来るんです。「招待が来たから行ってもいいか？」って聞いたら、ワシントン大学は「いい」というわけです。「招待を受けるのは、大学にとっても名誉だ」と。でね、僕はカリフォルニア大学のバークレー校に行ったんです。何を話したかは忘れた。そこでね、面白いことがあったの。話し終わったら、先生でも学生でもないような1人の中年の紳士が近付いてきたんです。それがマクソンさんという人だった。

内藤　マクソンさんとは？

伊藤　僕の旧制高校時代の英語の先生だったんですよ。「よく、僕がここで話すのを分かりましたね」と言ったら「掲示が出ていた」と言うんです。マクソンさんは僕のことをよく覚えていてね、高校時代、僕は座る席が決まっていたんですよ。「あなたはいつも決まった席に座っていた」と言うんです。でね、とにかく「私の家に来い」って言うわけです。僕はホテルを予約してあったんだけど、結局、その頼みに負けてマクソンさんの案内でグルグル回ったんです。

内藤　面白いですね。そういう出会いもあるんですね。

伊藤　それからもう一つはね、ワシントン大学でも僕を訪ねてきた人がいたんです。リチャード・マッキンガムさんという人。「やあ」と訪ねてきたんです、研究室に。アメリカは研究室とは言わなくてオフィスと言うんですが、高校時代に、マッキンガムさんは四高にいたんだけど文科系だから話はしたことなかったんです。戦争が始まった時に本国に送還されてね、兵隊にも行ったらしい。結局、マッキンガムさんとはずいぶん親しくしてもらいましたけど、マッキンガムさんは、私が持ってる授業を一度聞かせてくれと言うわけですよ。何の話をしたかはこれも覚えていない。

内藤　マッキンガムさんっていうのは何をされている方だったんですか。

伊藤　中国文学じゃないかね。日本にいる時は学生ですよ。日本通のライシャワーさん［＊17］の所で中国文学をやっていたと言ってました。

内藤　『日本デザイン論』［＊18］という著書がありますね。あれはワシントン大学の時の講義をまとめられたと冒頭で書いておられる。

伊藤　そうそう。ワシントン大学の1ヵ月分の講義録です。

内藤　1ヵ月であんなに講義をなさったんですか。あんなところまで。

［＊17］エドウィン・ライシャワー（1910〜90）東京生まれ、16歳まで日本在住。ハーバード大学で東洋研究に従事。アメリカにおける本格的な日本研究の中心的存在。1961年、駐日大使として着任し、安保騒動後の日米の相互理解を深めることに尽力。父・オーガストは宣教師で、東京女子大学の創設に尽くした人物。東京女子大学の敷地内には、かつて家族で住まわれていた宣教師館が「ライシャワー館」として保存されている（大川）

［＊18］『日本デザイン論』（鹿島研究所出版会1966）▸▸▸図版p.30上

著作権所有者の都合により
掲出できません

「日下部邸内部俯瞰」（『日本の民家 高山・白川』所収、撮影：二川幸夫）

伊藤　週2時間だから。
内藤　1ヵ月分ということは4回ぐらいの講義ですね。ずいぶん密度が濃いですが、果たして向こうの人はあれで理解できたんでしょうか。日本文化の本質に踏み込んだ深い話ですから。
伊藤　たぶん理解できたと思うよ。
内藤　ワシントン大学っていうのは、建築学科は…。
伊藤　ミノル・ヤマサキがあそこの出身で、彼は尊敬されているみたいだった。
内藤　そうでしょうね。
伊藤　卒業設計があるんだよ、メモリアルホールの。それが、残してありましたよ。
内藤　結局、何年行ってらっしゃったんですか。
伊藤　そんなに行ってないよ、2年半ぐらい。

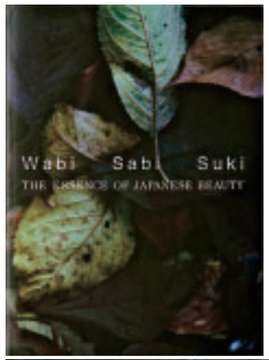
## 倉敷と、実家のある大垣

内藤　ぜひ伺っておきたいのは倉敷の話です。先生は美観地区を中心とした倉敷のまちづくりとかかわりが深いわけですが、お付き合いはどういうところからですか？
伊藤　倉敷は、一番最初は頼まれたんですよ。
内藤　倉敷の方からですか。
伊藤　そう。倉敷は有名だったでしょ、昔から。
内藤　大原家から頼まれたんですか。
伊藤　いや、地区全体として。
内藤　いわゆる今の美観地区になっている所ですか。
伊藤　そう。「やるなら時間をかけてやりましょう」と言ったんです。それで僕は調査員を連れて、倉敷の鶴形山の神社にお参りに行ったんですよ。坂を上がるのは大変だったけど、調査は一軒一軒あいさつしなくちゃいけないでしょう。でも実際、建てた人はもう亡くなられている。だからね、この神社にあいさつしてから仕事を始めようと思った。もう一つは写真集［＊19］を見ると分かるんだけど、立面図に影を長くつけて描こうと思ったんです。影がついているでしょ。本に載ると小さいですけど、原図は1／50で描いてあるんです。
内藤　要するにサーベイとはいえ、影はちゃんと入れようと。
伊藤　そう、影を入れると奥行きが出るからね。それとこういうやり方をすると、他の人は真似できないわけですよ。「伊藤さんのところに頼むと、同じ金を出しても他のところとはちょっと違うことをやってくれる」と倉敷市は思ったらしい。以後、ずっと倉敷の顧問みたいになりました。
内藤　『日本の民家』をやられている時に倉敷とのお付き合いが始まったんですね。
伊藤　ずいぶん長いね。
内藤　実は今、景観法をベースに美観地区の問題も含めてどうするかということをやっています。
伊藤　「こうすることは悪いことですよ」ということを図面で示すわけです、結果としてどうなるか。ともかく具体的に見せなきゃ分からない。そうすると、大変なことになるって分かるわけです。
内藤　今考えると、倉敷はよくあそこまで保存できたなと思います。でも難しい問題も幾つか出てきていて、最近の基準法で耐震診断をやると、蔵が全部アウトになってしまう。難しい問題です。ところでマツダの海外向けPR誌『Wabi Sabi Suki』［＊20］に出ている倉敷の大原美術館を俯瞰した写真、このアングルがとても好きなんですけど。
伊藤　ああ、そのシリーズ持っているの？
内藤　特別に頼んで取り寄せました。もはや貴重本です。直感的に日本文化を紹介するのには最適の本ですね。ともかく写真のセレクトが素晴らしい。一つひとつの写真に緊張感があり、ちゃんとしたメッセージになっています。小冊子なのにすごい密度です。この本は、伊藤さんと田中一光さん［＊21］と瀬底（恒）さん［＊22］のゴールデンコンビでやられたんですね。
伊藤　そう。瀬底さんとは親しかった。幾つか仕事をして、このシリーズで3種類ぐらいやりました。
内藤　瀬底さんとは1960年のデザイン会議の時からですか？
伊藤　そう。その時の知り合い。僕はデザイン会議のメンバーじゃないけど、でも入れてあげようと言って、浅田さんが入れてくれたんです。でも何もしなかった。あのパンフレットをつくるのを手伝っただけ。
内藤　あの時、瀬底さんは事務局次長でしたね。
伊藤　あの人は編集の人だからね。だから、何かにつけてつい「瀬底さんつくってよ」と言っちゃうわけです。でも、知恵を出したのは僕らですよ。で、いろんな資料もお互いに持っているからそれを合わせて、「これが良い、あれが良い」と言ってつくっていった。『Wabi Sabi Suki』は、このシリーズの一番最後の一冊です。
内藤　素晴らしいですね。このセレクション。
伊藤　これはね、普段いろいろ歩いていて「ああこれがいい、あれがいい」ということが頭の中にあってね、それを1冊にまとめたんです。
内藤　この中の先生の文章もとても興味深い。勉強になりました。“Wabi Sabi Suki”というこのタイトルは先生がつくられたんですか？
伊藤　“Wabi Sabi”の2つじゃ数が悪いからね、3つにしたんです。
内藤　それで最後の“Suki”に関しては、いろんなところで書かれてきましたけど、民家は基本的には柱梁の文化だと書かれています。それに対して数寄屋というのは全く違うロジックだというふうに、

『日本デザイン論』

伊藤ていじ「有心・無心建築論」『新建築』1974.4

上――『Wabi Sabi Suki―THE ESSENCE OF JAPANESE BEAUTY』
下――大原美術館を俯瞰した写真「Tiled roof storage houses now remodeled as crafts gallery in Kurashiki」（写真：石元泰博）



［＊19］『日本の民家』▶▶▶p.26参照
［＊20］『Wabi Sabi Suki―THE ESSENCE OF JAPANESE BEAUTY』（Mazda Motor Corporation　1993）▶▶▶図版左下
マツダカルチャーブックシリーズの9冊目
［＊21］田中一光（1930〜2002）
（『INAX REPORT』No.176、p.30参照）
［＊22］瀬底 恒（1922〜2008）
（『INAX REPORT』No.176、p.23参照）

［＊23］伊藤ていじ「有心・無心建築論」『新建築』1974.4　▶▶▶図版上
［＊24］小堀遠州（1579〜1647）
（『INAX REPORT』No.176、p.30参照）

2つを対立的に書いておられる。その上で、現代建築、モダンリビングは数寄屋に近いんだということも書かれています。
伊藤　実感だね。僕の生まれた建物は、柱梁の建物の母屋だったの。僕が病気で寝たり勉強したりしていたのは、別棟のいわゆる数寄屋風の書院ですよ。そこで寝ていてそう感じたんですよ。
内藤　先生は原体験で既に2つあったわけですか。
伊藤　そういう感じしか持てないんだよ。
内藤　民家の柱梁の考え方に対して、数寄屋というのは間取りが先にあって、その後に構造があるという考え方が、なるほどそういう見方もあるのかなと思いました。
伊藤　実際そうでしょ。
内藤　恐れ入りました（笑）。先生のご実家ですが、岐阜のどちらですか。
伊藤　大垣の近く。大垣駅から3kmの辺り。
内藤　大垣というのは、前に行ったことがありますが、あそこは川と運河の町でしたよね、昔は。水の都ですよね。地主というのは、小作がたくさんいて、だいぶ大きかったんですか？
伊藤　私の家で管理していなかったから。各村にいる支配人が管理していたらしい。
内藤　その幾つかの村を統括していたわけですね。
伊藤　そういうことをしているとは知らなかったの。後から分かったんです。
内藤　それじゃあ、過去を辿るとすごいんでしょうね。
伊藤　詳しくは分からないんです。親父は早く死んだし、お袋は料理もできないような世間知らずだしね。だから僕は美濃の民家の調査は嫌いなんですよ。死んだ親父のことを知っている人が多いんです。親父は基樹（もとき）っていうんだけど、「基樹さんの子どもか」と言われてね、それが嫌なんだ（笑）。この家はまさか言わないだろうと思うと、それが言うんですよ。
内藤　きっとみんな、お世話になっているんですよ、基樹さんに。
伊藤　新幹線に乗っていてもね、こっちの方に生まれた村があるなという感じだけで嫌なんです。
内藤　『日本の民家』から先生の生まれた美濃の近辺が抜かれているわけは、そこにあったんですね。やっと分かりました。

## 「有心・無心建築論」から『現代建築愚作論』

内藤　最後に、先生が投げた変化球、1974年に『新建築』に掲載された「有心（うしん）・無心（むしん）建築論」［＊23］について伺いたいんですが。
伊藤　書いた覚えがある。「有心・無心建築論」というのは…。
内藤　これはすごい変化球です。学生の頃に接したんですが、強烈に印象に残っています。たぶんメフィストフェレスが書いた文章ですね。
伊藤　あれを書かせたのは、たぶんメフィストフェレスだね。
内藤　まず、いわゆる正統的建築家の理想主義的な態度を“有心”とし、そうしたものに縛られない現実主義的態度を“無心”と位置づけ、「実際は有心・無心が一人の中に併存するはずだ」と書かれています。要は、「キレイゴトばかり言っていても仕方がない、小堀遠州［＊24］もそうだった。現代社会を冷静に見れば大勢としてはそうならざるを得ないんだからそれをちゃんと見ろ」という論ですね。
伊藤　題はね、後から付けたんだよ。“有心・無心”っていうのはね、俳句か何かの言葉ですよ。多少ジャーナリスティックな書きぶりだけど、書いたのは当たり前のこと。別に変なことを書いたわけじゃないからね。
内藤　やっぱり日本が向かっていく方向に対して、素知らぬ顔をしながら、一貫してシニカルな立場をずっととっていますね。
伊藤　そう、とっていた。民家をやってると、逆に見えてくるものもあるからね。
内藤　半分は前川（國男）先生は素晴らしいと書きつつも、つまり、いわゆる近代建築家というか日本の建築家像を置いて、一方で反対側に無心というのを対置させる。ラブホテルの建築家、というようなものを出してきて無心を説明する（笑）。その上で、他はほとんどこの真ん中にいるじゃないか、というようなことを書かれています。かなり面白いけど、毒がある。
伊藤　だってそのとおりじゃない。そう思わないかな。僕はそう思うよ。
内藤　それはメフィストフェレスですから真実を言い当てているけど、なかなか建築界にとっては、キツイ一発だったと思うんです。反論はありませんでしたか。
伊藤　「伊藤さんに言うと、うるさいよ」という感じはあったと思う。でもね、うるさくったっていいじゃない。
内藤　あんまり反論できなかったんでしょうね。このとおりですからね。それに先生は怖がられていたんですよ。
伊藤　みんなね、何か新しい仕事をすることに一生懸命だったんだよ。
内藤　有心・無心を抱え込んだ俗物としては反論し難いもんです。八田利也の気分と、この文章の気分というのは大体同じですね。
伊藤　そうそう、そうなの、八田利也の気分だ。
内藤　実際は、前川先生をどういうふうにご覧になっていたのですか？
伊藤　前川さんのことについては言えないな。僕は

著作権所有者の都合により
掲出できません

「倉敷の町屋の俯瞰（本町付近）」（『日本の民家 山陽路』所収、撮影：二川幸夫）

前川さんには信頼されていたからね。

内藤　前川先生とはお付き合いが深かったんですか。

伊藤　深いですよ。弁護士の役をやったこともあるんです、前川さんの。

内藤　それは丸の内の時ですか。

伊藤　いや別の時。一般的に、建築家が報酬額を決めるのはね、違反だって言うから。

内藤　建築家協会の設計料設定に対する独占禁止法違反［＊25］ですね。その時に相談に乗られたんですね。

伊藤　そう、中身は忘れたけど。

内藤　ところで、いよいよペンネーム“八田利也”に触れたいんですが、これもなかなかの人物ですね。1961年の『現代建築愚作論』。先生の著作の中では『日本の民家』を終えた2年後ですが、文章はそれよりかなり前に書かれているんですね。

伊藤　初めの頃です。

内藤　「有心・無心建築論」は、八田利也から約15年後ですが、やっぱり同じ気分だったんですか。ずっと変わらないですね。八田利也の時に磯崎さんと川上さんと始められましたけど、磯崎さんの建物について、先生はどういうふうに見ておられたんですか。ぜひ伺っておきたいんですけど。

伊藤　磯崎さんは、その当時はね、自分で考えていた時期じゃないかな。

内藤　この八田利也の頃ですか。

伊藤　うん、自分で。そうかといって仕事は来ないしという感じだった。「大分の図書館」［＊26］、ああいう建物をやって初めて歩いていくことができたという感じだった。それまではね、磯崎さんのところに仕事が回ってこないんだ。「こんちきしょう」って思っていたでしょうね。

内藤　磯崎さんも結構シニカルな感じですよね。八田利也の正体を明かすと、これは誰が書いたか分からないことになっていますが…。

伊藤　書いたのは僕ですよ。

内藤　でも、3人で書いたんでしょ？

伊藤　一応ね、3人の意見が入っていますけど、僕が文章にして統一したわけだ。

内藤　あっ、じゃあ、3人でぐちゃぐちゃ話した内容を先生がまとめられたというわけですか？

伊藤　そうそう。こういうタイトルなんかも、いろんな人の意見を聞いて考えたんです。

内藤　僕は3人で代わりばんこに書いているのかと思った。

伊藤　いやいや、意見は3人の意見が入っているんですよ。それとイラストは1つや2つぐらい入っていなきゃいけないというので、これは他の人に頼んで入れてもらったんだ。

内藤　面白いですよね、これ。

伊藤　磯崎の考えが入っているのは…。

内藤　「小住宅ばんざい」［＊27］みたいなところですね。後は都市論みたいなのは、川上さんの意見が割と入っているのかなとか。

伊藤　そうそう入ってる。

内藤　何となくそういうふうに思ったんですけど。

伊藤　でも実際はいろんな人の意見が入っているんです。

内藤　先生が最終的に全部書いているとは知りませんでした。

伊藤　文章として書いたのは僕ですよ。統一できないもん。これはね、僕が勝手に書いたんです。

内藤　それで本全体として雰囲気が通っているんですね。

伊藤　そう。無理をして、僕が全部つくって書いたんです。

内藤　それは新事実。分担して書いたのかと思っていました。

伊藤　分担じゃないですよ。

内藤　昔、持っていて読んだ記憶があるんですが、探しても見つからなかったし、古本屋を当たってもないんです。今日は、大学の図書館で借りてきました。

伊藤　結構、部数は出たと思うけどね。

内藤　そうでしょうね。

伊藤　あのね、『現代建築愚作論』はね、ある日、大学に行ったら「この本は面白いから」って言いふらしている先生がいました。

内藤　誰ですか。

伊藤　名前は言えない（笑）。

内藤　もう時効だからいいんじゃないですか。建築学科の先生ですか。

伊藤　もう亡くなられていないよ。丹下さんも言ってたよ。

内藤　面白いって？

伊藤　丹下さんは知っている人から「この本を読め」と言われて、もらって何冊も持っていると言っていた。

内藤　怒っていませんでした？

伊藤　怒っていないですよ。僕は丹下さんとね、仕事を一緒にしようとしたことがあるんですよ。それは丹下さんが頼んできたからなんだけど、でもね、一度もうまくいったことがない。

内藤　それはどんな仕事ですか。

伊藤　例えばね、一番古い話では「日本の伝統の映画をつくってくれ」と、外務省から頼まれたんです。日比谷に日活のホテルがあったんです。丹下さんと丹下さんの知り合いの映画製作者の方とそこで会ったんですが、丹下さんは螺旋階段をさっそうと下りてきて、格好良かったんですよ。それで「じゃあ、やろう。映画をつくろう」という話になってね。早速、丹下さんは「日本建築には水平的なものと垂直的なものがある」と始まるわけよ。

『現代建築愚作論』

［＊25］日本建築家協会設計料設定に対する独占禁止法違反
1975年12月25日、日本建築家協会（以下、家協会）は公正取引委員会から独占禁止法に基づく勧告を受けた。家協会が拒否回答を行ったため、この問題は76年3月18日、最高裁における審判の場に持ち込まれた。当時、幾つかのコンペにおいて、設計事務所間で事前の話し合い（談合）が行われていたことに対し、家協会が除名処分、あるいは勧告処分の処置をとった。こうした談合の違反を防止するための内部統制として家協会が報酬規定を定めたことに対し、当局が勧告に踏み切ったものである。一方、建設省側にも新報酬規定制定の動きがあったため、多くの議論を呼んだ。その背景には、建築家の仕事を単なる商業行為を超えたものとする家協会のタテマエの職能論と、“資格法”にすぎない現行の建築士法の問題が横たわっていた（大川）

［＊26］大分県立大分図書館（1966）磯崎新アトリエ

［＊27］初出：八田利也「小住宅ばんざい」『建築文化』1958.4

［＊28］『日本列島の将来像―21世紀への建設』丹下健三著（講談社　1966）

いとう・ていじ――建築史家／1922年生まれ。
1945年、東京大学工学部建築学科卒業。その後、同大学助手、同大学生産技術研究所特別研究員、ワシントン大学客員教授、工学院大学学長を経て、現在に至る。
主な著書：『中世住居史―封建住居の成立』（東京大学出版会　1958）、『現代建築愚作論―現代における都市と建築に関する考察』（彰国社　1961）、『日本デザイン論』（鹿島研究所出版会　1966）、『重源』（新潮社　1994）など。

ないとう・ひろし――建築家・東京大学大学院社会基盤学 教授／1950年生まれ。1974年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。1976年、同大学大学院修了。1976～78年、フェルナンド・イゲーラス建築設計事務所。1979～81年、菊竹清訓建築設計事務所。1981年、内藤廣建築設計事務所設立。
主な作品：海の博物館（1992）、安曇野ちひろ美術館（1997）、茨城県天心記念五浦美術館（1997）、牧野富太郎記念館（1999）、十日町情報館（1999）、倫理研究所 富士高原研修所（2001）、ちひろ美術館・東京（2002）、島根県芸術文化センター（2005）、メディジン市ベレン公園図書館（2008）など。

**取材協力・資料・写真提供**
石元泰博
大川三雄（日本大学理工学部 教授）
ジーエー・フォトグラファーズ
新建築社
水上町子
（50音順）

**［次号予告］**
**次号は「著書の解題総集編」。**
**ゲストは建築史家・大川三雄。**
**4月20日発行です。**

特集2
［対談］時代を画した書籍―11

内藤　興味深いですね。

伊藤　僕はあれが分からないね。そんなこと言ったって、僕には水平的なものばっかり見えてる。垂直的なものって五重塔なんかは垂直に見えるけど、あれは水平のものを積み重ねただけの話だからね。それで、ごたごたやっている間に物価が上がってね、外務省が金を出せないということになって、この話はつぶれた。

内藤　それは何年ぐらいの話ですか。

伊藤　日活のホテルが出来た頃の話だからね。世界デザイン会議の前。

内藤　じゃあ50年代ですね。

伊藤　それからね、建築ブームの時にね、『日本列島の将来像』［＊28］という本を丹下さんが出したんです。

内藤　21世紀の本ですか。

伊藤　それは講談社が、丹下さんの書いたものを集めてまとめたものなんです。約10年後くらいだったと思いますが、丹下さんは「伊藤さん、NHK出版が新たに本をつくりたいと言っているから、これをまとめてくれ」と言って僕に見せた。見たらね、前の本とそっくりになるわけ。自分で書いたものを、寄せ集めたわけだから。「丹下さん、これは道徳上できない。断った方が良いですよ」と言ったんです。そしたら丹下さんは「そうか」と言うわけ。そして後日ね、東大の竜岡門の近くにすき焼屋があるでしょう。

内藤　湯島の方に行った所ですね。

伊藤　そう。でね、丹下さんはどう言って断るかと、僕は興味があったんですよ。当時、僕は丹下さんの子分みたいなものだったからね、くっついて行ったんですよ。すき焼屋へ行ったら、NHKの人が3、4人待っていたわけです。で、その断り方が気に入ったんだ。「僕は引き受けると言った。引き受けると言った時に、金の話は一度も出なかった」と言うわけ。「金の話がないような話は通じない」と。それでおしまいよ。

内藤　それはすごい（笑）。

伊藤　なるほど、丹下さんは良いことを言うと思った。僕は丹下さんといろんな仕事を一緒にしようとしたけど、実現したことは一度もないと言ったでしょう。僕の意見と丹下さんの意見が違ったり、丹下さんが編集者の意見と違ったり、いろいろあった。映画については、その時分はもうあらかたの伝統なんて観光化しているから興味なかったけどね。

内藤　観光化しているものはもう興味ないわけですか？残り方はいろいろあると先生は言われていますよね。民家というのは、既に実態を失った。実体を失ったものの残り方というのは幾つかあって、そのうちのひとつは観光、伝統保存。

伊藤　それをどんなふうに残すかは、住んでいる人の美意識ですよ。僕はね、感心したのはね、吉島さんのお父さんがね、“民家”という言葉を使われない。「家は住みながら育てて美しくするものだ」っておっしゃる。お父さんというのは口下手な人だったけど、本当に哲学を勉強した人なんです。エイジングという言葉があるでしょ。僕は昭和40年にもう使っていたけどね。エイジングっていうのは、つまりね、“住んで美しくなった家”のこと。そのために何をするかというのを、吉島家のお父さんは教えて下さったんですよ。

内藤　いろいろなことを示唆する深い話ですね。

今日は長い間お付き合いいただきましてありがとうございました。先生は後になって思い出して、あんなことを言わなきゃ良かったって考えちゃうそうですね。今日の対談も後悔されるのかな（笑）。先生の後悔をひとつ増やしたとしたら申し訳ありません。戦後史を振り返るような貴重なお話をありがとうございました。✽

（2008.8.11収録）

伊藤氏（左）と内藤氏

**［対談後記］　内藤 廣**
**「メフィストフェレスの追想」**

民家や日本文化の深層に目をやる学者、一方で都会の建築を厳しく評するメフィストフェレス。ふたつの人格が交互に顔を出す。徹底したアウトサイダーの立ち位置。飄々とした風貌と語り口からは想像できない凄みがある。一時も気が抜けない。やはり一筋縄ではいかない人です。力量不足を感じるばかりでした。それにしても、戦後から一貫してフィールドを民家と定め、それを基点とした博識と慧眼、おそるべし。民家論と伊藤さんの存在そのものが、そのまま戦後社会の裏返しの批評になっていたのではないかと感じました。その場所からは、都会で起きていること、建築界の潮流、世の行く末、あらゆることが見えていたんでしょうね。もともと、良い意味でのアカデミズムには、常にそういう視座が在ったことを思い出しました。冷めた目線で世情を厳しく見つめる、そうすると自然にその語り口はメフィストフェレスにならざるを得なくなるのだと思いました。✽

[特集2]コラム

# 動物的な人間・知性を持った人間

曽我部昌史
MASASHI SOGABE

学生の頃は、時間を見つけてはどこかに出かけていた。東北地方を周遊券で野宿旅行したり、奥多摩を原付バイクで回ったり、友人の車を借りて信州に行ってみたり。民家や集落を訪ねることも少なくなかった。当時、残存している民家や集落の情報を得るのは簡単ではなく、日々、雑誌の記事をスクラップしたりして、出かける機会に備えていた。『民家は生きてきた』も、その頃に一度読んだ記憶がある。初版（1963年）から既に25年近くたっていて、ガイドとしての資料性に乏しかったこともあり、あまりじっくりとは読まなかった。いや、そんなことよりも、当時の私の大雑把な思考と知識では、いろいろな水準の分析が縦横無尽に展開するこの本の、立体的で濃密な構成についていけなかったに違いない。

大学の図書館から借りてきて、改めて読んだ。写真集『日本の民家』の解説部分を集めてつくられた本である。地域別の章立てとなっていて、それぞれの地域に建つ民家の特徴を、さまざまな背景との関係から考察する。意表をつくような切り口も多い。工法と気候の関係から外観を読み解いたかと思えば、身分制度の社会的な位置づけと寸法体系の関連を探る。気候特性と家畜のタイプを関連づけ、それが平面構成上の特徴に結び付いたりもする。その頃の日本人的世界観を言い伝えで表現し、それが架構の形式とどのように関連しているかを問う場面もあった。淡々と地域別にまとめられているように見えるのだけれど、地域相互の関係が出稼ぎ労働や材料供給の視点で接続されたりもする。民家を観察する視点のレンジが広く、すべてが関連づけられている。緻密に構成された壮大なミステリー小説のようですらある。そういう意図で書かれたわけではないだろうから、民家の真実を語ろうとするとこのようになる、ということだろう。民家は、身体感覚、歴史観、産業、気候などといった、さまざまな状況と同列に扱いながら読み取るべき運動体の一部なのだということが、論考全体として伝わってくる。

このようなことを考えながら本書を読み直していたのと同じ頃、熊本で12名の建築家が集まって建築の可能性について議論する機会があった[＊]。その最後に、建築とは何か、という質問が全員に投げかけられた。建築家たちの回答は、おのおのがどのようなことを問題にしながら建築をデザインしようと考えているのかについての解説になっていて、三者三様の切り口が興味深かった。新しい空間の獲得を目指しているというところでは共通しているのだけれど、デザインをする上での具体的な方法の位置づけが異なっていて、特に、坂本一成さんと藤本壮介さんのスタンスの違いが浮き彫りになった。その違いを題材にして、伊東豊雄さんが次のように総括した。

「人間には、動物的な人間と、知性を持った人間の2つの側面がある。藤本さんは動物的身体に絞って建築を構想することで、新しい建築の開き方が獲得できないかと考えている。一方、坂本さんは建築を巡る数千年の歴史の中で培われた、知性に支えられた秩序の中に建築を位置づけるのでなければ、本当の意味で建築を開くことはできないと考えている。そして自分は、人間の新しい身体性に目を向けながら、同時に、それを支える新しい建築的秩序の獲得を目指したい」、こう結んだ。記録をしていたわけではないので、私なりの考え方で翻訳されている部分も少なくないだろうけれど、基本的にはそのような話だったと思う。

この本の再読中だったためか、伊東さんが言いたかったことは、民家のような建築の在り方を、この時代の状況を元に再構成することを目指してみたい、ということなのではないかと思った。つまり、建築は知性としての身体と動物的な身体の両方を引き受けられるようになっているべきで、そのことが可能になる新しい形式を獲得したいということだ。建築を取り巻く現代のあらゆる事情と渡り合うようにして成り立っていながら、同時に、明確な形式性と秩序を備えた建築となっていること。まさに、民家のような建築の秩序を獲得することなのだと、私の中では翻訳されていた。

帰りの飛行機で読み終わり、巻頭の「概説」を読み直した。『日本の民家』から採録するに当たって加えたものだそうだ。その最後、「3. 現代における評価　c.民家は保存さるべきである」で、当時の伊藤ていじさんの思いの丈がぶちまけられている。少し引用する。

「建設のために民家をこわしてよいとする者は、人間の努力にたいする軽蔑であると同時に、（中略）自らの現在の努力への誠実さを疑わせるものである。（中略）もし私たちが誇り高き現代人としての自尊心をもっているならば、祖先への郷愁としてではなくして、むしろ輝かしい構想力にみちた未来への現代的象徴として、民家を保存すべきであると考える」。

次々と押し寄せる開発の波で民家が壊され続ける状況を前に、いらだっている様子が目に浮かぶ。経済的成長のためには、限られたことだけに目を向けていればよいという時代の雰囲気へのいらだちか。伊東豊雄さんはシリアスそうにはしていなかったけれど、伊藤ていじさんと同様のいらだちを、先の発言に感じなくもなかった。✽

［＊］KAP建築セミナー「現代建築放談」くまもとアートポリス建築展2008 みちをひらく（2008.11.22）

そがべ・まさし――建築家・神奈川大学 教授／1962年生まれ。1988年、東京工業大学大学院修了。1988〜94年、伊東豊雄建築設計事務所。1994〜95年、東京工業大学建築計画第二講座助手。1994年、ソガベアトリエ設立。1995年、みかんぐみ共同設立。2001〜06年、東京芸術大学助教授。2006年より現職。
主な作品：NHK長野放送会館（1997）、八代の保育園（2001）、建外SOHO 低層商業棟（2003）、愛・地球博 トヨタグループ館（2005）、ソーシャルデザインカフェ ソボロ（2006）、もくもくもく（2007）など。



[特集2]コラム

# 風景美へのレクイエム

中井 祐
YU NAKAI

学生の頃、伊藤ていじの『日本デザイン論』と『日本の都市空間』[＊]は、座右に欠かせない書物だった。いま思えば、あの頃、仲間と交わした日本のデザインや文化にかかわる青臭い議論は常に、この2冊のそこかしこにちりばめられた言葉や概念の周りを、訳知りを装いながらうろつき回っているようなものだった。一方で、それ以外の伊藤の仕事、庭園や職人仕事や民家を扱った数々の著作は、私にとって、決して近しい存在とは言えなかった。作者がどのような立場で何を言わんとしているのか、という著述としての焦点が希薄に感じられ、どうもとっつきにくい印象があったからである。私は今回初めて、そのとっつきにくい方の伊藤の代表作のひとつである『民家は生きてきた』に、まともに向き合ったことになる。

これはひと言でいえば、個人的な思いや情をいっさい表に出さない作者の態度にもどかしさを感じるくらい、民家の“解説”に徹底した書である。戦後復興さなか、初々しくも志豊かな戦後日本モダニズム建築の初期傑作群が花開いた1950年代に、伊藤がなにゆえ全国の民家を巡り歩いてこのような解説を書かねばならなかったのか、またその行為が、当時の建築シーンや学界でどのような意味を持っていたのか、私はもちろん知らない。ただ正直にいえば、そこにさしたる興味はない。なぜならいま私が、このたぐいまれなる解説書を通読して受けるのは、戦後から高度成長期にかけて、この国の何か掛け替えのないものが確実に滅び去ったのだ、という胸かきむしられるような感覚なのだから。

もしも伊藤の解説が、間取りや空間の特徴、技術・構造・意匠などの、（狭い意味での）建築史学的範疇にとどまっていたならば、そのような感覚を受けはしないだろう。気候風土、中世にまでさかのぼるその起源、農民町民の暮らしと村社会、生業と信仰、職人たちの仕事と生活から技術材料の流通に至るまで言及するその全体は、さながら民家を核に据えた文明誌の趣である。近代文明という怒濤の波の前についえようとしている、日本という風土と社会が永らえてきた独自の文明のありようが、情実を排してただ淡々と綴られる。その筆致が、近代が滅ぼしたものの本質を、かえって鮮明に、残酷なほどに浮かび上がらせる（それが伊藤の本意かどうかは、この際どうでもよい）。そして、その滅びたものの本質、それを私は、あえて美と呼びたいのである。単に新文明が旧文明に取って代わるというだけの話ならば、私はこの感情を、後ろ向きのノスタルジーとして自らあざ笑うこともできよう。しかし民家とともに滅び去ったのは、紛れもなく、旧日本文明が産み、成立せしめてきた独自の美なのである。その事実を私は、胸かきむしられる思いとともに飲み込もうとし、そのあまりの苦さに嘔吐しそうになる。

景観を志した学生の頃、この国の美の面影を、まだかろうじて目にすることができた。例えば、砺波平野や斐川平野の屋敷林を携えた散居村、北関東の山奥の斜面にへばり付いた養蚕農家集落、豪雪に軒まで埋もれて点在する南会津の農家群。思えば近代という時代は、ついぞこの種の美を産み出すことがなかった。

この美を、あるいは風景美と呼ぶべきかもしれぬ。人間が日々の生を生きるために自然や風土と関係を結び、その総体が歴史的履歴を経て大地の上に結晶化した美。つまりその美としての本質は、突き詰めれば人間と自然風土との“関係”そのもののうちにあるのであって、明確な形を持ったオブジェのように、対象の属性によって規定される美とは違う。だから、なかなか意識化されることがない。“関係”のただなかにある当事者には、関係そのものを対象化することはできないからである。皮肉なことに、その“関係”が失われた時に初めて、私たちはそれを外側から眺めて対象化するまなざしを手に入れ、ようやく意識に取り込むことができる。そして失われたものの大きさに気付いて愕然とし、悔やむのである。『民家は生きてきた』は、旧日本文明が独自に育んできた“関係としての美”、すなわち風景美についての貴重な証言録であり、同時にレクイエムでもある。

私たちは今どうすべきか、を考えねばならない。少なくとも現代民家（あえて民家、と呼んでおこう）が将来、風景美として評価される可能性について、私は悲観的である。市街地や郊外、田園や農村に均質にはびこる現代民家のありように、不動産業界や住宅産業の思惑や都合は見てとれても、人間の日々の生と自然や風土とのアクチュアルな関係は、ちっとも見えてこないからである。

現代の建築に、滅びた風景の甦生を期待するよりはむしろ、全国各地でいま試行錯誤が展開されている川づくりやまちづくりの方に、まだ見ぬ次代の風景美の胚胎という希望を、託すべきなのだろう。そこには、人間と自然、人間と風土（その土地の履歴を含む）との関係を問い直し、再構築しようとする意志が、確かに芽吹きつつあるように見えるからだ。

伊藤はこの本の中で1ヵ所だけ、民家への心情をわずかにのぞかせる。「ここにも力強い機械文明の触手がのびつつある。（中略）これらの民家は時とともに消え去るばかりである。（中略）私たちはこうした民家の数々をふかい愛惜の情をもって見守ることができる」。

私たちの世代は、もはや見守るだけでは許されない。✽

［＊］『日本の都市空間』都市デザイン研究体著（彰国社編、彰国社　1968、「特集：日本の都市空間」『建築文化』1963.12を再編したもの）

なかい・ゆう――東京大学大学院 准教授（社会基盤学専攻）／1968年生まれ。1993年、東京大学大学院修士課程修了（土木工学専攻）、博士（工学）。アプル総合計画事務所、東京工業大学助手、東京大学助手等を経て、2004年より現職。専門は景観論、公共空間のデザイン、近代土木デザイン史。
主な著書：『近代日本の橋梁デザイン思想』（東京大学出版会　2005）、『グラウンドスケープ宣言』（共著、丸善　2004）、『GROUNDSCAPE―篠原修の風景デザイン』（共著、鹿島出版会　2006）『ダム空間をトータルにデザインする』（共著、山海堂　2007）など。
主な仕事：岸公園（島根県　1999）、宿毛河戸堰（高知県2004）と松田川河川公園（高知県　2006）、片山津地区水生植物公園（石川県　2005）などの土木施設・公共空間のデザイン。